

E16 横浜横須賀道路 逗子ICのり面崩落に伴う対応状況

1. 被災概要

- ・発災日時：令和3年7月3日（土）8時頃
- ・被災力所：横浜横須賀道路 逗子IC
- ・崩落規模：のり長40m×深さ4.5m×延長40m（約7,000m³）
- ・第三者被害：関係車両1台、負傷者1名（軽傷）

【位置図】



出典：国土地理院地図を加工

【被災状況】



提供：アジア航測(株)・朝日航洋(株)



2. 被災確認後の対応

(1) のり面上部の住民の安全確保

- ・2次災害に備え逗子市と協力し、のり面上部の住民の方々に避難を呼びかけ
- ・のり面上部の市道の立入禁止措置を実施
- ・被災当日は監視員による変動の監視を行い、翌日以降は観測機器を設置しリアルタイム監視を実施

＜観測機器＞

伸縮計：住宅地側3カ所

地盤傾斜計：のり面3カ所、住宅地側6カ所

変位計測計：のり面3カ所、住宅地側3カ所

- ・観測値に変動が見られた場合は、逗子市と連携し、避難所への避難を呼びかける体制を構築
- ・この道橋を含む市道は通行止めを実施

(2) 緊急車両通行路の確保

- ・崩落のり面から離隔があるHランプ（県道方面から高速道路へのオンランプ）の土砂を搬出
- ・発災から約38時間後の7月4日（日）22時にHランプを使用して、県道方面との出入を可能とする緊急車両用通行路を確保

【応急復旧状況】



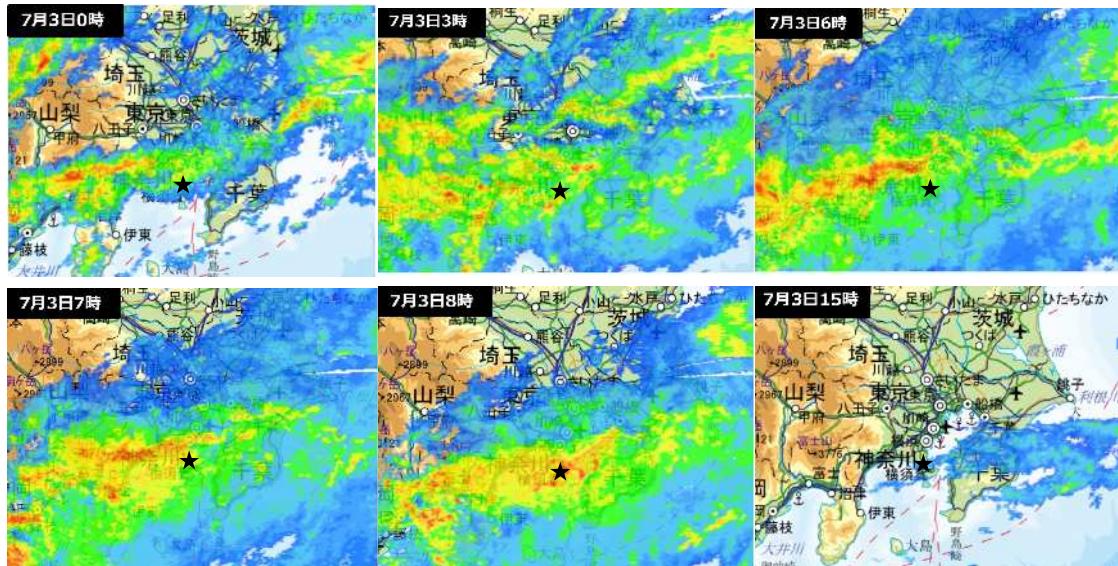
【緊急車両通行路利用状況】



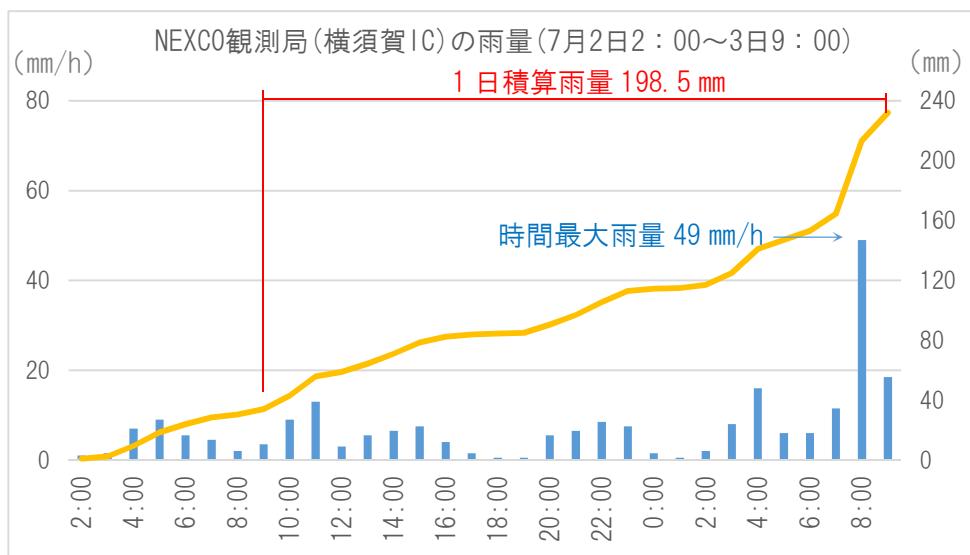
3. 災害発生時の降雨状況

- ・災害発生箇所近傍で今回観測された連続雨量（1日積算雨量、2日9時～翌9時）は、198.5 mmと過去10年間で最多
- ・降り始めから降り終わりに至る4日間の累計降水量（30日9時～4日9時）が353.5 mmと過去10年で最多

【気象レーダー】



出典：(株)ウェザーニュース（地理院タイルを用いて作成）



4. 現地状況（R3.7.16 逗子IC災害復旧に関する検討委員会）

- ・当該のり面は、泥岩砂岩が互層状に分布しており、切土面に対して流れ盤となる地質構造をしている。この流れ盤に沿ってすべり面と思われる平滑面が確認された
- ・今回の土砂崩落は、豪雨により流れ盤上の地下水位が上昇し、のり面が不安定になって発生したものと推察される

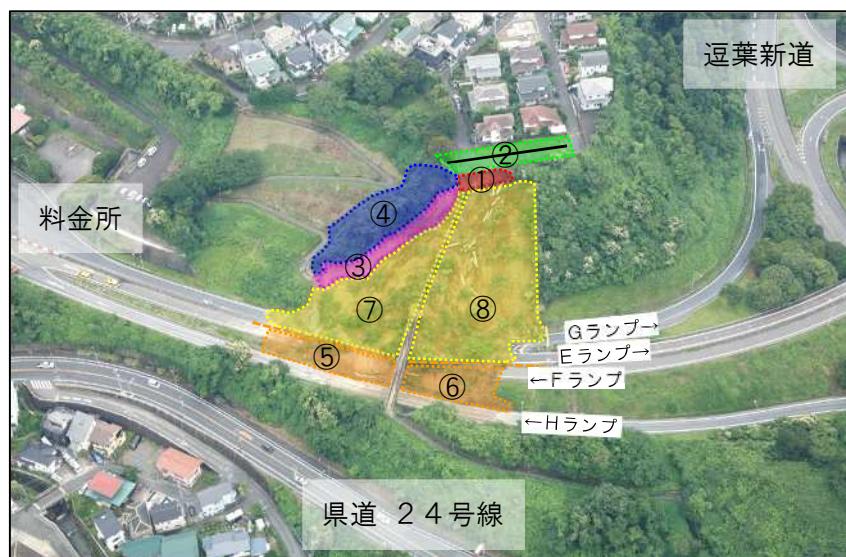


5. 応急復旧

本復旧対策は、崩落土砂を撤去したのち崩落部の測量、土質調査を行った上で、設計・工事を実施する必要があり、また、周辺地域への影響を最小限に、慎重に施工を行う必要があるため、相当な時間を要する見込みである。

このため、住宅地及び作業時の安全確保を最優先とした上で、土留め壁の設置や崩落土砂撤去等を行うことで概ね3ヶ月を目途に暫定的に逗子ICが利用再開となるよう応急復旧を進める方針。

【応急復旧概要】



- ・①③のり面上部の崩落防止のため、のり面保護などを施工
(ファイバー入りモルタル吹付け・水抜き孔設置など)
- ・②住宅地側の安全確保のため抑止工を施工
- ・⑤⑥Fランプに堆積している崩落土砂の排土、ランプ暫定運用時の安全対策の施工（防護工：土留め工など）
- ・④作業の安全確保のため、のり面上部の不安定土塊を撤去
- ・⑦⑧のり面に堆積している土砂の排土



【現在の作業状況（R3.7.26）】

(参考)

横浜横須賀道路 逗子IC災害復旧に関する検討委員会

1. 日時

令和3年7月16日（金）13：00～17：30

2. 議事

- ・現地調査結果
- ・応急対策工と動態観測計画 等

3. 委員

太田 秀樹 中央大学 研究開発機構 機構教授

奥園 誠之 公益財団法人 高速道路調査会 シニアフェロー

菊本 統 横浜国立大学大学院 都市イノベーション研究院 准教授

竹本 将 株式会社高速道路総合技術研究所 道路研究部
斜面防災研究担当部長

宮武 裕昭 国立研究開発法人 土木研究所 地質・地盤研究グループ
グループ長

渡邊 一弘 国土交通省 国土技術政策総合研究所 道路構造物研究部
道路基盤研究室 室長

(50 音順、敬称略)